西牟田上京手遺跡

福岡県筑後市大字西牟田所在遺跡の埋蔵文化財調査

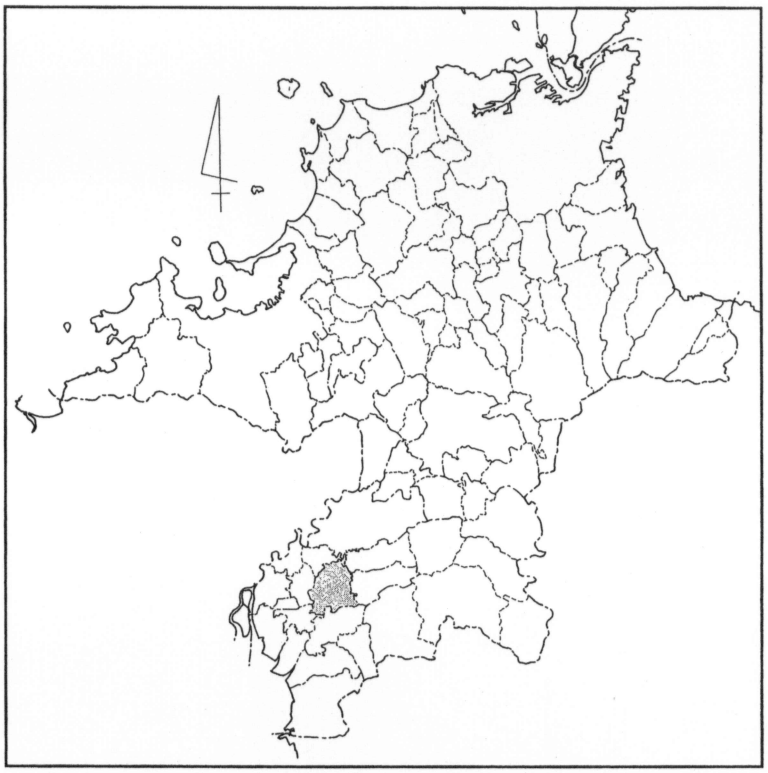
筑後市文化財調査報告書
第46集

2003

筑後市教育委員会

西牟田上京手遺跡

福岡県筑後市大字西牟田所在遺跡の埋蔵文化財調査



2003

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する西牟田上京手遺跡は筑後市の北西部にあり、古代より三潴荘の一角をなす西牟田村の中心として発展してきた地域であります。今回の発掘調査では、中世の遺跡を確認することができました。また、市内では始めて人の足跡の痕跡を確認する事が出来ました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、（有）田中不動産をはじめ、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成15年３月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口　和良

例　言

1．　本書は、宅地造成に伴い、有限会社田中不動産の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成14年度に大字西牟田において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2．　本書使用の遺構実測図は立石真二が製作し、浄書を行なった。
3．　本書使用の遺物実測図は立石が製作し、浄書を行なった。
4．　本書使用の写真は永見秀徳・立石が撮影した。
5．　本書使用の標高は海抜高であり、方位はG.N.である。
6．　本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
7．　本書に掲載した遺物の縮尺は土製品は1/3、石製品は1/2を基本とする。
8．　本書の執筆・編集は立石が行なった。
9．　本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目　次

第１章　調査経過と組織 …… 1
　1　調査に至る経過
　2　調査組織
　3　調査経過
第２章　位置と環境 …… 5
　1　地理的環境
　2　歴史的環境
第３章　遺構と遺物 …… 7
　1　西側調査区　基本層序
　2　西側調査区　検出遺構
　3　東側調査区　基本層序
　4　東側調査区　検出遺構
　5　出土遺物
第４章　結語 ……18
　付　出土遺物一覧表 ……20
　Tab.1　遺構一覧表
　Tab.2　出土土器一覧表
　Tab.3　出土石器一覧表
図　版 ……21

第１章　　調査経過と組織

１．調査に至る経過

西牟田上京手遺跡は福岡県筑後市大字西牟田に所在する。この一帯は筑後平野の豊かな農業地帯の一角であり、対象地も水稲、麦、大豆などを栽培する農地であった。近年、この周辺ではクリークに囲まれた狭小な農地を整備し近代的な農業経営を進めるため、いくつかの圃場整備事業（筑後川下流土地改良事業三潴地区、低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業筑後北部第二地区など）が行なわれたが、当地は旧来からの景観が残された数少ない地区のひとつであった。

平成11年９月16日、（有）田中不動産（以降「甲」とする）より筑後市教育委員会社会教育課文化係（以降「乙」とする）に対し、該当地における埋蔵文化財の有無の照会がなされた。対象面積は36,310.82㎡である。「乙」はこれを受け平成11年11月から平成13年７月の間に２度にわけて試掘調査を行ない、対象地の北側において遺構の存在を確認、この結果を「甲」に回答した。この結果を受け両者は協議を行ない、対象地は1mほどの盛土を施すため遺構には影響がないものの、共用部分である道路予定地に関しては、これが永久構築物であるため発掘調査を行なう事で合意した。調査対象面積は約750㎡である。両者は平成14年４月２日に発掘調査を開始することで合意し、平成14年４月１日に協定を締結した。

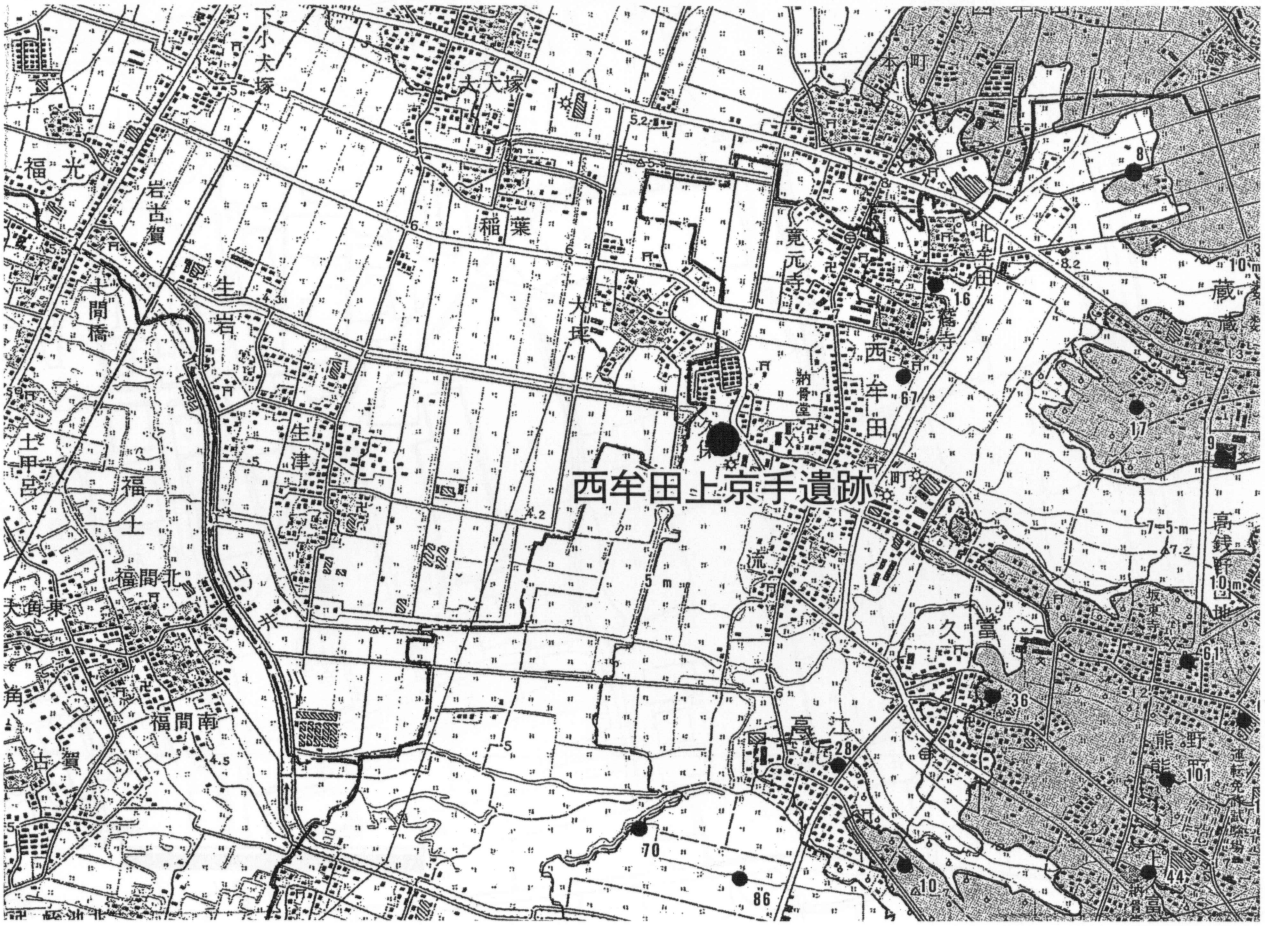


Fig.1　西牟田上京手遺跡　位置図（S＝1/25,000）

（遺跡番号は筑後市文化財調査報告書第34集を参照）

2．調査組織

西牟田上京手遺跡に関わる調査組織は以下の通りである。

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良				
教育部長	下川　雅晴				
社会教育課長	庄村　國義（平成11年４月～平成13年４月）				
	松永盛四郎（平成13年４月～）				
文化係長	田中　僚一（平成11年４月～平成12年３月）				
	成清　平和（平成12年４月～）				
文化財専門職	永見　秀徳	小林　勇作	上村　英士		
文化財学芸員	柴田　剛	立石　真二			
調査作業	青井　秀子	奥村　太郎	加藤ちえ子	北島　茂徳	田島ヤス子
	田島　好江	田中ミドリ	壇　ちゑ子	中村　三男	東　末子
	平島　慶子	平島　久光	福田百合子	満川香代子	渡辺　泰子
整理補助員	仲　文恵	平塚あけみ			
整理作業	妹川　玲子	佐々木寿代	野口　晴香	野間口靖子	湯川　琴美
	横井　理絵	福井　円			

Fig.2　西牟田上京手遺跡　調査範囲位置図（S＝1/2,500）

3．調査経過

西牟田上京手遺跡の調査は、平成14年４月２日～同６月15日の期間で行なわれる事となった。この際、付近の農家の農作業の為に通路を確保してほしいとの申し出があり、現時点で使用されている農道を調査対象から除外することとなった。また、調査区の中間には農道とクリークが走っており、調査区は西側と東側に２分されることとなった。調査は排水作業や今後の農作業などを考慮して、水の流入の多い西側調査区から行なわれる事となった。西側調査区では小土壙と幅広の溝状遺構を、東側調査区では小土壙と足跡列が確認された。調査期間中は時期外れの降雨により度々作業が中断され、思うようには作業が進まなかったが、５月29日には発掘作業を終了し、６月15日には作業の全日程を終了した。

なお、調査および報告書作成に際しては、開発者である（有）田中不動産をはじめ、各工事関係者、各関係機関より多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に関して貴重な御教示・御指導を賜った。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

富岡　直人（岡山理科大学）、小川　泰樹、平　博子（福岡県教育庁）、小田　和利（九州歴史資料館）、塚本　映子（三潴町教育委員会）、狭川　真一（元興寺文化財研究所）

【参考文献】

三潴町史編さん委員会・編　『三潴町史』　三潴町史編さん委員会　1985
筑後市史編さん委員会・編　『筑後市史』　筑後市史編さん委員会　1998

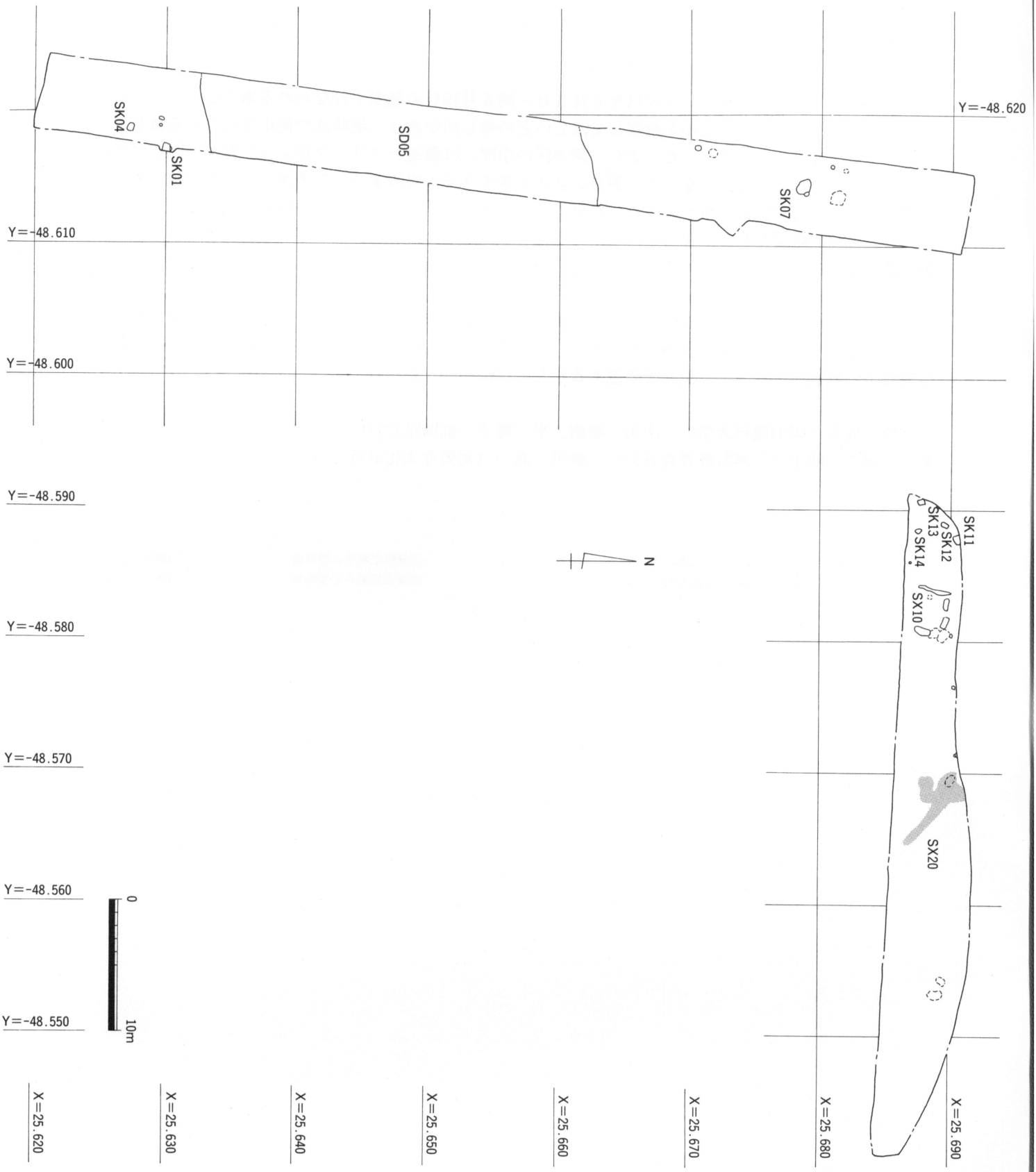


Fig.3　西牟田上京手遺跡　遺構配置図（S=1/400）

第２章　位置と環境

１．地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

２．歴史的環境

筑後市大字西牟田は旧来は三潴郡に属し、隣接する三潴郡三潴町大字西牟田と一つの地域をなしていたが、戦後の市町村再編の折りに農業を中心とした三潴町側と手工業を中心とした筑後市側に分割再編されて現在に至っている。地勢的には八女丘陵の西端部から南に広がる低湿地帯で、筑後川水系の倉目川流域にあたる、水稲耕作に適した地域である。

筑後市側では弥生時代以前の遺跡は確認されていないが、三潴町側では八女丘陵南斜面において、縄文時代の落とし穴と弥生時代中期～後期の住居跡（円形竪穴式住居３基、方形竪穴式住居４基）を確認した西牟田清導寺浦遺跡、弥生土器が散在している十八遺跡、銭亀・孫田遺跡が知られている。

古代において、三潴郡は豪族「水沼君」一族、八女郡は「筑紫君」一族の勢力地とされている。八女丘陵上には筑紫君一族により大型の古墳が造営され、丘陵西端部にあたる三潴町大字西牟田にも小型の古墳が造営されたが、確実に現存するものは十連寺古墳のみである。この古墳は古くから知られていたが、病院建設に伴い一部が破壊された。時期的には５世紀末から６世紀初頭のものと考えられている。この他には銭亀古墳、孫田古墳、十八古墳が知られていたがいずれも開発により今も現存しているか否かはわからない。なお、銭亀古墳からは石棺が確認されていたとのことである。

古代律令体制下では、強大な国家権力の下に官道が整備され、班田給付法の施行に伴い土地が条里制によって区画された。三潴町部分では松村一良氏により条里が復元されている。筑後市では条里の名残りと考えられる区画を地図上に見る事が出来たが、近年の圃場整備によりその景観は失われた。また、西牟田町にある水引地蔵尊周辺は、明治の初めの頃まで「口分田村」と呼ばれていたと云われている。

平安時代の後期から全国的に荘園が形成されるが、この地域にも三潴荘が建てられた。三潴荘は宝荘厳院領の中核をなす大荘園であり、その領域は三潴郡外にも広がっていた。鎌倉時代初期には領主四条隆季が親平家派であったため、一時的に惣地頭職として和田義盛が下向したこともあった。その初期には領域に西牟田の地名はなく「西牟田村」の名が初見できるのは鎌倉時代以降の文献からである。延応年間（1239～1240）に入り、伊豆より藤原家綱が西牟田の地頭職として赴任し、以後「西牟田氏」と称して勢力を拡大し、この地域の歴史を担っていく。この時期の遺跡としては筑後市に西牟田鷲寺遺跡（霊鷲寺跡）、西牟田城跡、水引地蔵尊（正覚寺跡）、現存する寺社仏閣に天満神社、寛元寺。三潴町に西牟田嬉野遺跡（時期は断定できず、荘園に関する可能性のある遺跡として報告）、三島神社遺跡がある。

室町時代には守護職の補佐を命じられるほどになった西牟田氏は、戦国時代には筑後武士団の中でも「大名衆」と呼ばれるほどに成長した。西牟田氏の動きは当時の筑後の安定しない状況を示しており、少弐、菊池、大友、龍造寺氏など、諸大名の旗下に属している。天正年間、肥前龍造寺氏についた西牟田

氏は西牟田城を出て要害の生津城に移り、生津城が落城するとさらに城島城に移った。この城島城も島津氏の北上により落城、当主の西牟田家周は逃げ延びた。その後、豊臣秀吉の九州仕置きの際に所領5万石は没収され、以後西牟田氏は龍造寺氏およびこれに替わった鍋島氏の家臣として肥前蓮池に移り住み、文禄の役にも参加している。この間の遺跡として西牟田館跡（筑後市大字西牟田字流、三潴町大字西牟田字本村の2ケ所）がある。また、三潴町の清導寺下溜め池は室町時代の築堤と言われている。

近世初期には三潴郡の領主は安定しなかったが、元和6年以降は久留米藩主有馬氏の領地として幕末に至る。この間西牟田城の城下町は在郷町として整備され、農業用水を確保するために千間溝の開削および貯水池の築堤が進められた。また戦乱により末寺の多くを失っていた霊鷲寺は、久留米藩の支藩である松崎藩（現在の福岡県小郡市）の菩提寺とするため同地に移され、今に至っている。

【参考文献】

右　田　乙次郎	『筑後市神社仏閣調査書第三集（西牟田篇）』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1972
右　田　乙次郎	『西牟田むらの生いたちの記』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1973
福岡県教育委員会・篇	『福岡県遺跡等分布地図』	福岡県教育委員会	1979
三潴町史編さん委員会・篇	『三潴町史』	三潴町史編さん委員会	1985
廣　崎　篤　夫	『福岡県の城』	海鳥社	1995
塚　本　映　子	『西牟田嬉野遺跡』	三潴町教育委員会	1997
筑後市史編さん委員会・篇	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998
塚　本　映　子	『西牟田清導寺浦遺跡』	三潴町教育委員会	2001

第３章　　遺構と遺物

１．西側調査区　　基本層序

西側調査区は調査前は標高５ｍ以下の水田で、耕作土は暗灰色砂や暗黄色砂を含む砂質土である。この中には石炭や水和の見られる黒耀石などが含まれており、近年の盛り土であろうと考えられる。耕作土を10cmほど掘り下げるとシルト質に近い、肌理の細かな灰色砂層（色調は植物痕などの影響の為まだら状である）となる。この層は中世の遺物を多く含んでいる。この層を10～15cm掘り下げると、鉄分を多く含んだ灰色シルト層となる。この面が遺構の検出面である。遺構面は北側で揺るやかな谷状になるが、ほぼ平坦に広がっている。この面の標高は約5.1ｍである。

２．西側調査区　　検出遺構

この調査区では溝状遺構１条、小土壙３基、ピット状遺構９基を検出した。検出されたピットには規則性が認められず、建物などの復元には至らなかった。

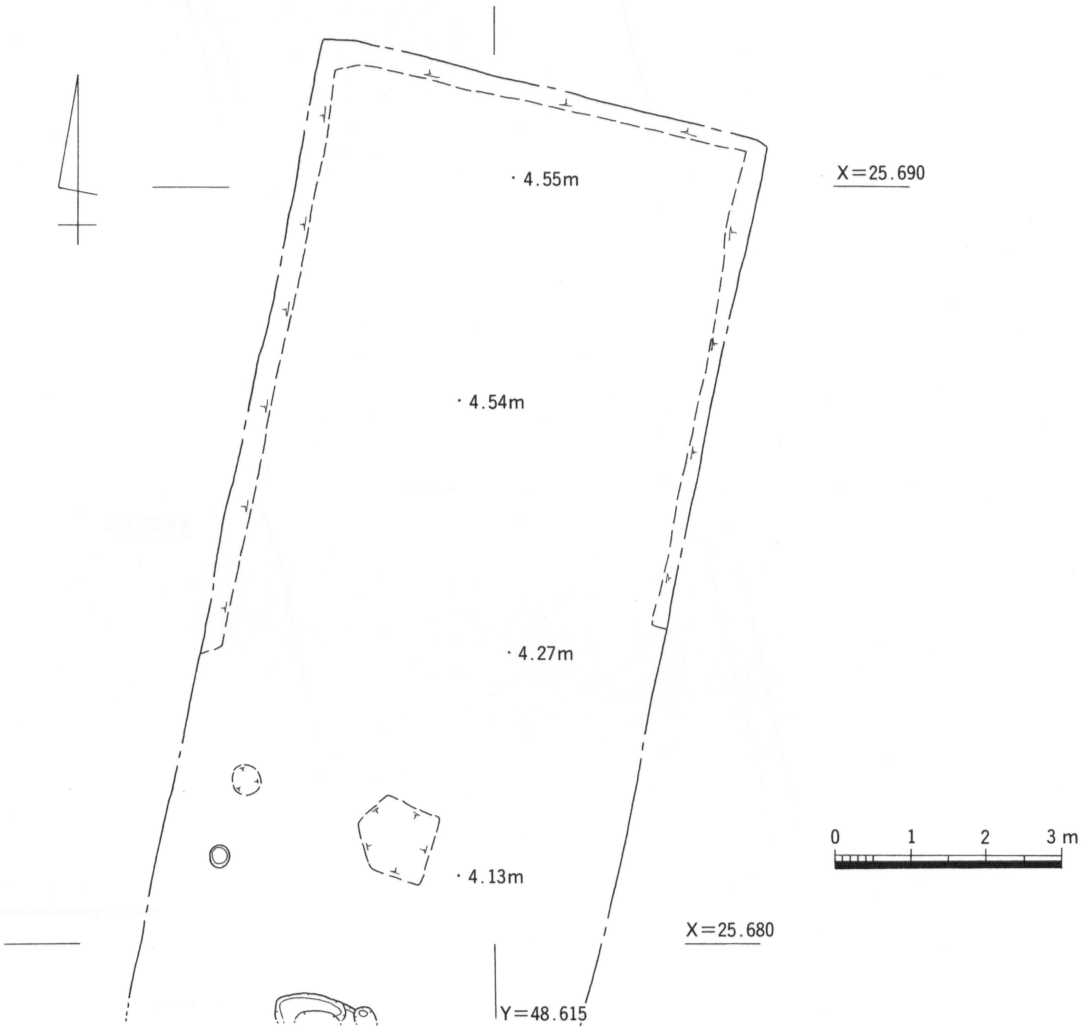


Fig.4　西側調査区　全体図（１）（S=1/100）

溝状遺構

SD05（Fig.6～8、Pl.2－1）

調査区南半から確認された遺構で、検出長約６ｍ、幅約25ｍ、深さ約0.6ｍを測る。東西方向に走る遺構である。断面は緩やかな皿状であり、埋没状況も自然埋没の様相を示す。地山との分層面からは葦と思われる植物遺体が多く確認された。また、この遺構の床面からはピット状の遺構が３基確認されたが、SD05と関連する遺構なのかは不明である。この遺構からは遺物の出土はなかった。

小土壙

SK01（Fig.9、Pl.2－2～3）

調査区南側から検出された土壙で、SP06を切る。東半分は調査区外へと広がっているが、検出部分は

Fig.5　西側調査区　全体図（２）（S=1/2,500）

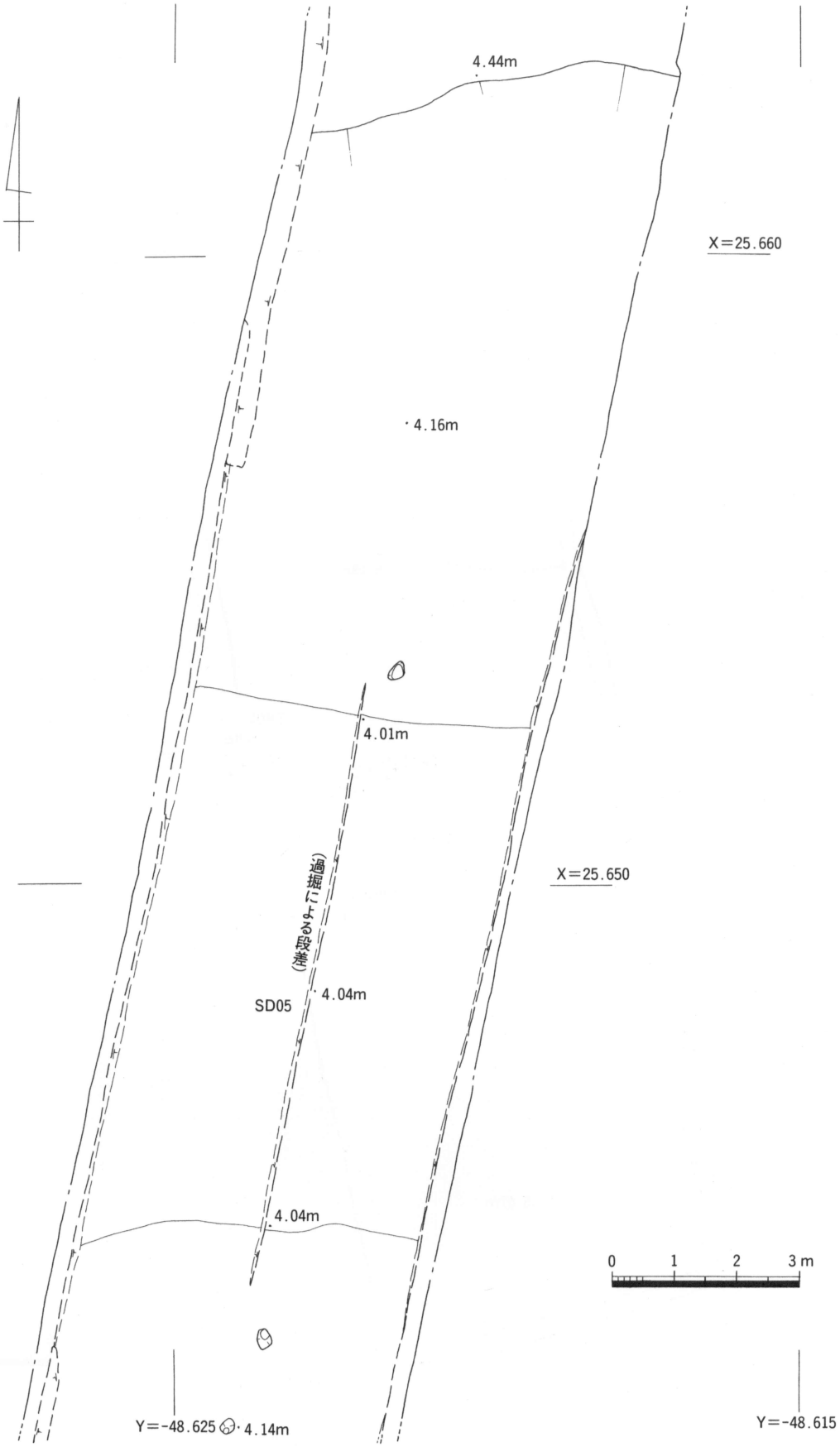
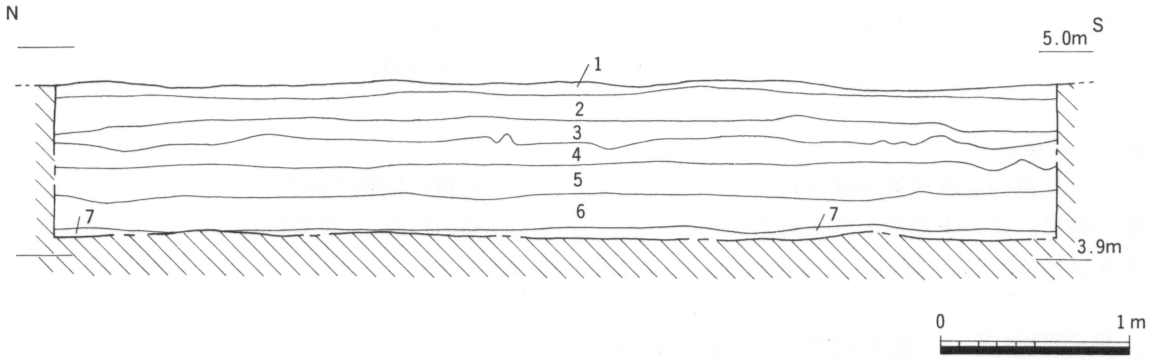


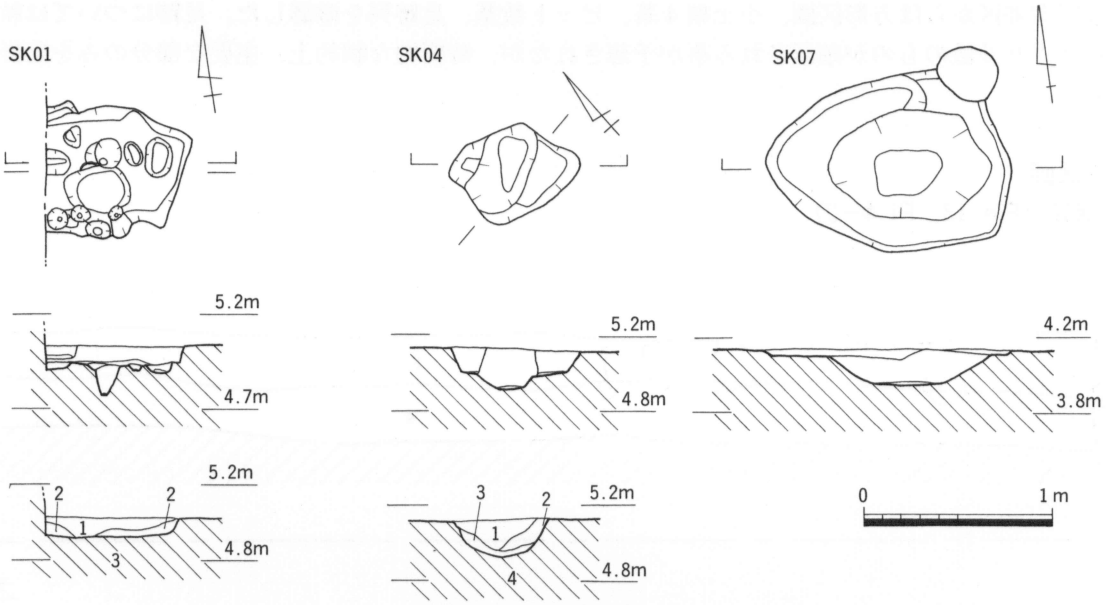
Fig.6　西側調査区　全体図（3）（S=1/100）

Fig.7　西側調査区　全体図（4）（S=1/100）



1　暗灰色砂・暗黄色砂混合層（砂質土。石炭、黒耀石を含む。）
2　灰色砂層（シルトに近い。中世遺物包含層。）
～覆　土～
3　黒色粘土
4　暗灰色粘土
5　灰色粘土
6　黒灰色粘土（下層との分層面に植物遺体を多く含む。）
～SD05埋土～
7　白灰色粘土（地山）

Fig.8　SD05土層断面図（部分）（S＝1/40）



SK01
1　灰色粘土（マンガン粒・炭化物を少量含む）
2　灰色粘土（青灰色粘土ブロック混入、マンガン粒少量含む）
3　青灰色粘土（地山）

SK04
1　黒色粘土（マンガン粒含む）
2　黒色粘土（青灰色粘土ブロック混入、マンガン粒含む）
3　黒色粘土・青灰色粘土混合層
4　青灰色粘土（地山）

Fig.9　西側調査区　小土壙（S＝1/40）

ほぼ長方形の土壙である。検出部分での長軸約0.7m、短軸約0.6m、深さ約0.1mを測る。床面には0.05～0.15mの小ピットが確認されたが、その性格は不明である。この土壙からは土師器片（小皿）が出土したが、調査中に紛失してしまった。遺存状況は悪く、時期の特定に至るものではなかった。

SK04（Fig．9、Pl.2−4〜5）

調査区南側から検出された不定型のの土壙で、北東側にSK01が位置している。法量は長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-48°-Wを測る。埋土状態から遺構の切り合いも想定できるが、検出時点では明確には出来なかった。この土壙からの出土遺物はなかった。

SK07（Fig.9）

調査区北側の谷状地形の底から確認された土壙である。北側に同様の遺構らしきものを確認したが、調査の結果、これを遺構とは認められなかった。法量は長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-82°-Wを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

3．東側調査区　基本層序（Fig.10、Pl.4−1）

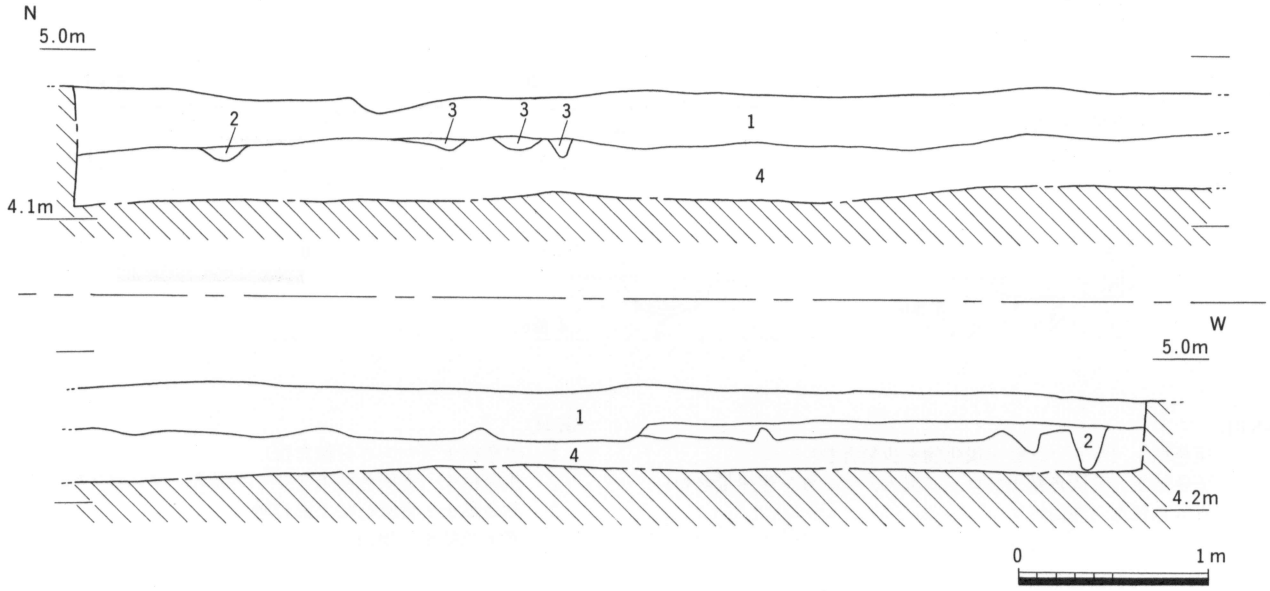
東側調査区も西側調査区と同様、調査前は標高5m以下の水田であった。耕作土は暗灰色の砂質土で、土鍋などの土師器や陶器片を含んでいる。この下の層は灰色粘土やこれが酸化した黄色粘土などを主体とした混合層（1層）となる。この下は鉄分を多く含んだ灰色粘土層（3層）となるが、どの層も西側調査区のようなシルト質に近い状況ではなかった。

4．東側調査区　検出遺構

東側調査区からは方形区画、小土壙4基、ピット数基、足跡列を確認した。足跡については精査を進めればより多数のものが確認される事が予想されたが、時間的な制約上、主要な部分のみを記録するに留めた。

方形区画

SX10（Fig.13、Pl.4−2）



1　灰色粘土・黄色土混合層（覆土）
2　黒灰色粘土（遺構埋土）
3　暗灰色粘土（SX20埋土）
4　灰色粘土（地山）

Fig.10　東側調査区　基本層序（S=1/40）

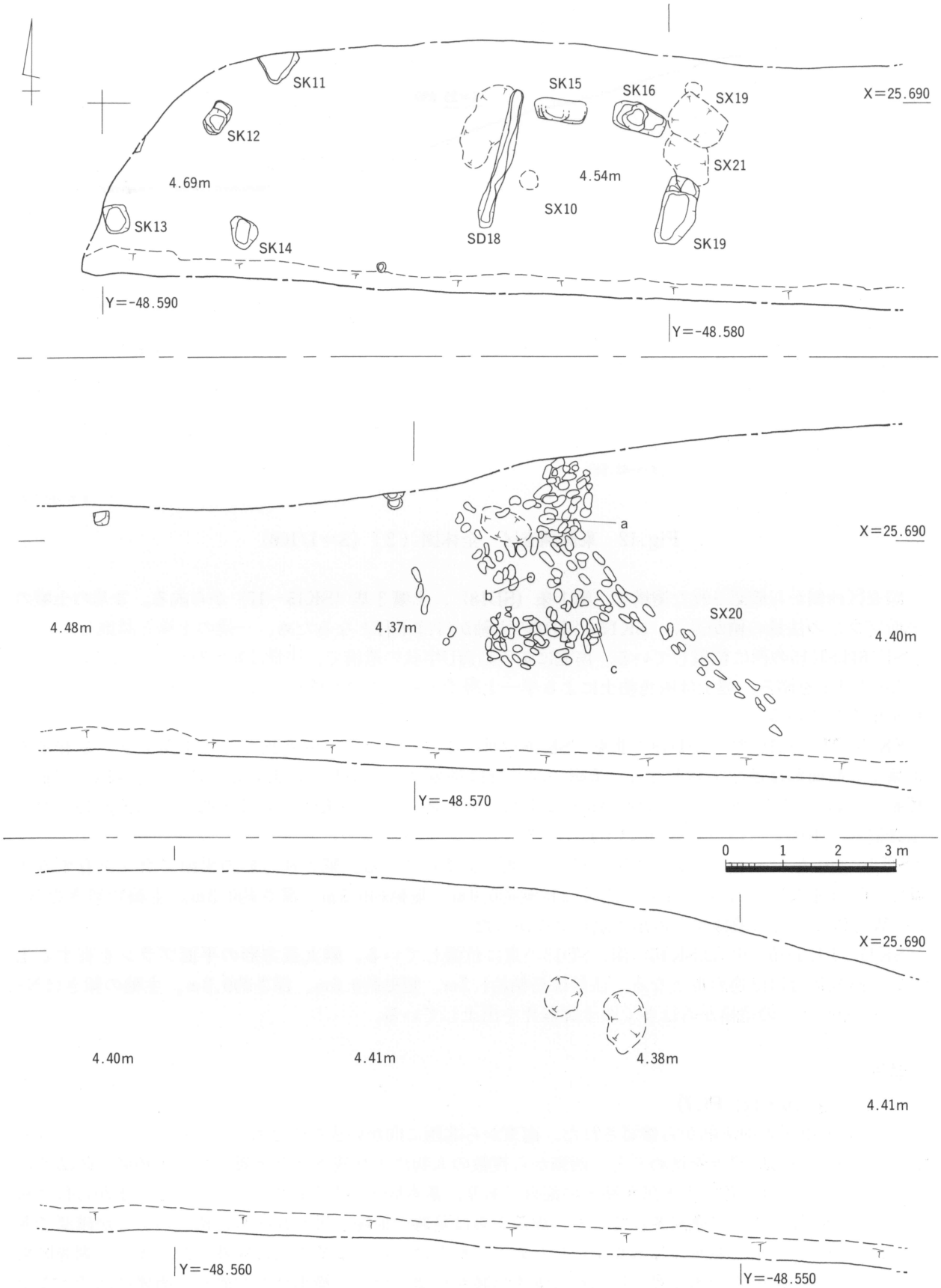


Fig.11　東側調査区　全体図（1）（S=1/100）

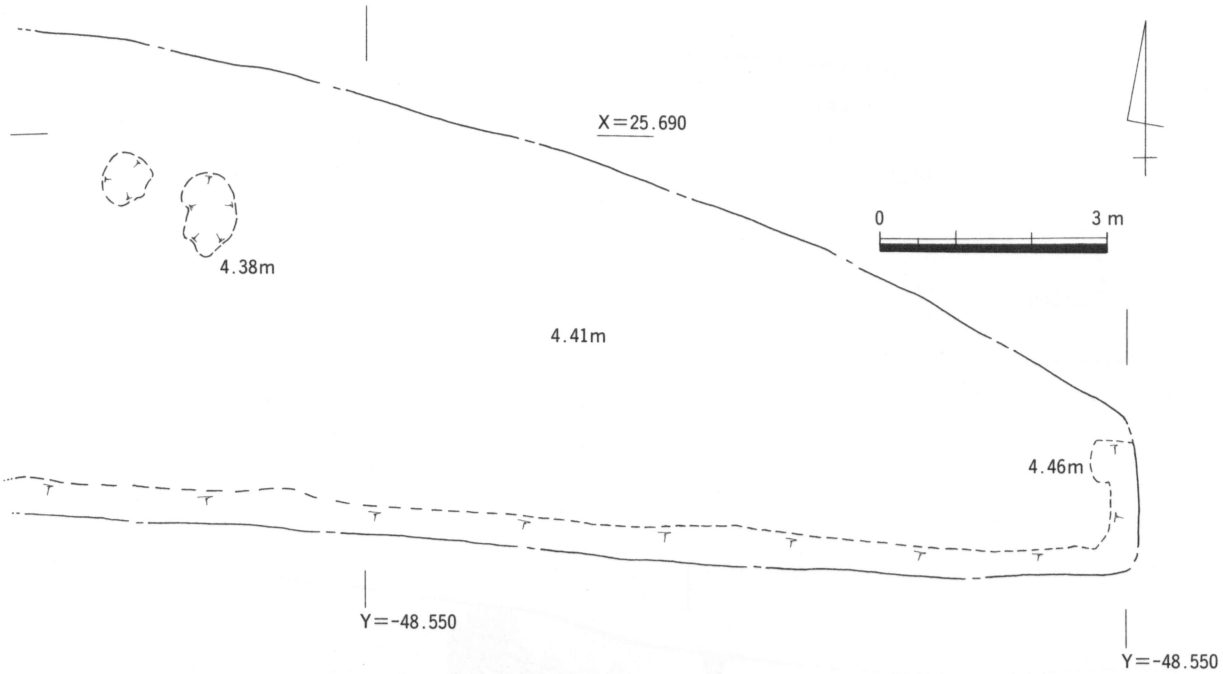


Fig.12　東側調査区　全体図（2）（S=1/100）

調査区西側から確認された遺構で、溝1条（SD18）、土壙3基（SK15～17）から成る。3基の土壙の平面プランの法量の値が近く、SK17とSD18の主軸がほぼ平行となるため、一連の土壙と認識した。

SD18はSK15の西に位置している。南北に走る断面U字状の遺構で、法量は幅0.3m、長さ2.5m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土は灰色粘土による単一土層である。この遺構からは土鍋（Fig.15－3）、土師器片が出土している。

SK15（Pl.5－1～2）はSD18の北東、SK16の西に位置している。隅丸長方形の平面プランを有する土壙で、断面形は逆凸字形となる。遺構の北半分は過掘により不明ではあるが、法量は長軸約0.9m、短軸約0.4m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-83°-Wを測る。この遺構からは土師器坏（Fig.15－2）、土師器片、不明骨（Pl.8－3）が出土している。

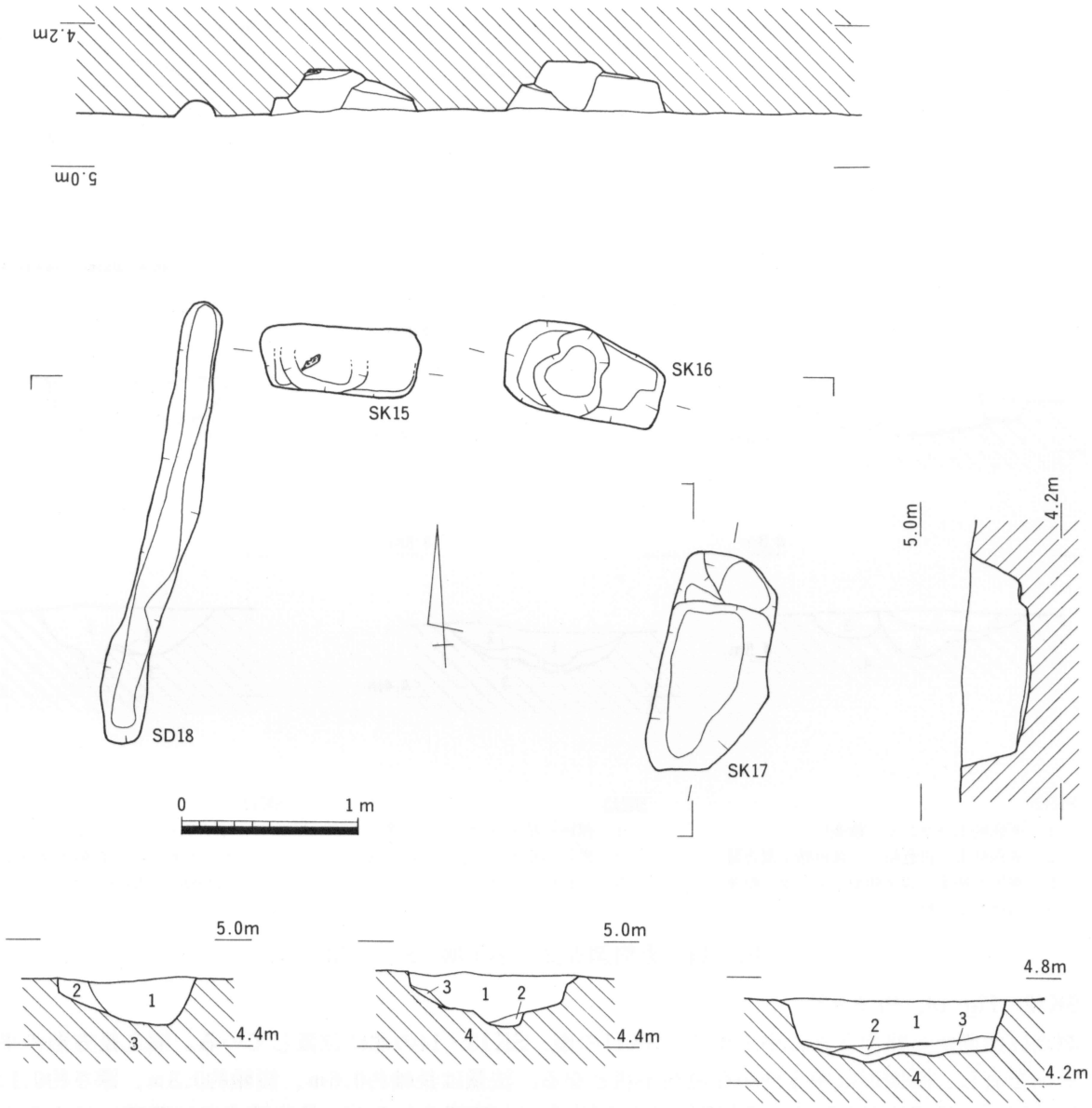
SK16（Pl.5－3～4）はSK15の東、SK17の北に位置している。隅丸長方形の平面プランを有する土壙で、断面形は逆凸字形となる。法量は長軸約0.9m、短軸約0.5m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-76°-Wを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK17（Pl.5－5～6）はSK16の南、SD18の東に位置している。隅丸長方形の平面プランを有する土壙で、断面形はほぼ逆台形となる。法量は長軸約1.2m、短軸約0.6m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-19°-Eを測る。この遺構からは多くの土師器片を出土している。

足跡群

SX20（Fig.10・11、Pl.7）

SX20は調査区の中央部から確認された。南東から北西に向かい少なくとも2人が移動したと思われる痕跡である。さらに精査を進めると、西側から複数の人物により残されたと思われる足跡群が確認された。SX20の埋土は灰色粘土と黒色粘土の混合であり、基本層序からも耕作土や床土などの上から付けられたものではないことが確認されている。周辺からは足跡の痕跡と思われる灰色粘土のシミが確認できたが、地山との区別を明確に出来なかったため、これらについては基本的に除外した。また、調査区東端からも足跡の可能性のある黒色粘土から成る痕跡を確認したが、検出状況が悪く、明確にはできなかった。



SK15
1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土・灰色粘土混合層
3　白色粘土（地山）

SK16
1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土（白色粘土粒少量混入）
3　暗灰色粘土・白色粘土混合層
4　白色粘土（地山）

SK17
1　灰色粘土（マンガン粒多い）
2　明灰色粘土（水成）
3　黒色粘土・白色粘土混合層
4　白色粘土（地山）

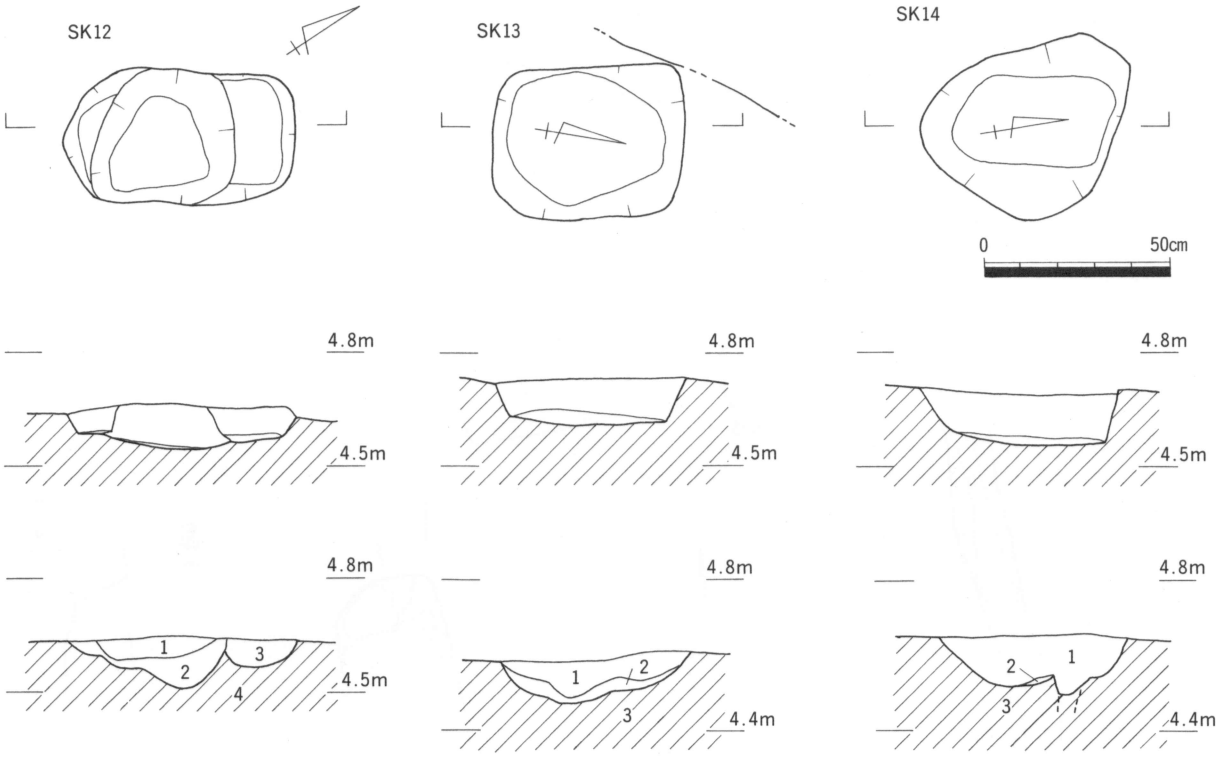
Fig.13　SX10（S=1/40）

小土壙

小土壙は調査区の西端において検出された。当初は柱穴と考えていたが、土層断面からはそのような状況は見られず、掘り方も浅い事からその性格は不明である。

SK11（Fig.11、Pl.6−2）

調査区北西部から部分的に検出された小土壙で、埋土は灰色粘土の単一層である。この遺構からは弥生後期〜終末期の土器片、土師器片を出土した。



SK12
1　灰色粘土（マンガン粒多）
2　灰色粘土・白色粘土・黄色粘土混合層
3　暗灰色粘土（炭化物少、マンガン粒多）
4　白色粘土（地山）

SK13
1　黒灰色粘土（マンガン粒多い）
2　黒灰色粘土・白色粘土混合層
3　白色粘土（地山）

SK14
1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土・白色粘土混合層
3　白色粘土（地山）

Fig.14　東側調査区　小土壙（S＝1/20）

SK12（Fig.14、Pl.6－3）

調査区西側から検出された小土壙で、SK11の南、SK13・14の北に位置している。隅丸長方形の平面プランを有し、断面形はゆるやかな逆凸字状となる。法量は長軸約0.6m、短軸約0.3m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-32°-Eを測る。土層面からは切り合いが確認されるが、検出時点では明確には出来なかった。この遺構からは土師器片、焼粘土塊を出土している。

SK13（Fig.14、Pl.6－4）

調査区西端から確認された小土壙で、SK12の南、SK14の西に位置している。隅丸長方形の平面プランを有し、断面形は逆台形状となる。法量は長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-10°-Wを測る。この遺構からは土師器皿（Fig.15－1）、土師器片を出土した。

SK14（Fig.14、Pl.6－5）

調査区西側から検出された小土壙で、SK12の南、SK13の東に位置している。不定型な平面プランを有し、断面形は逆台形状となる。法量は長軸約0.5m、短軸約0.5m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-8°-Eを測る。この遺構からは土師器片、骨片を出土した。

5．出土遺物（Fig.15、Pl.8）

SK13出土遺物

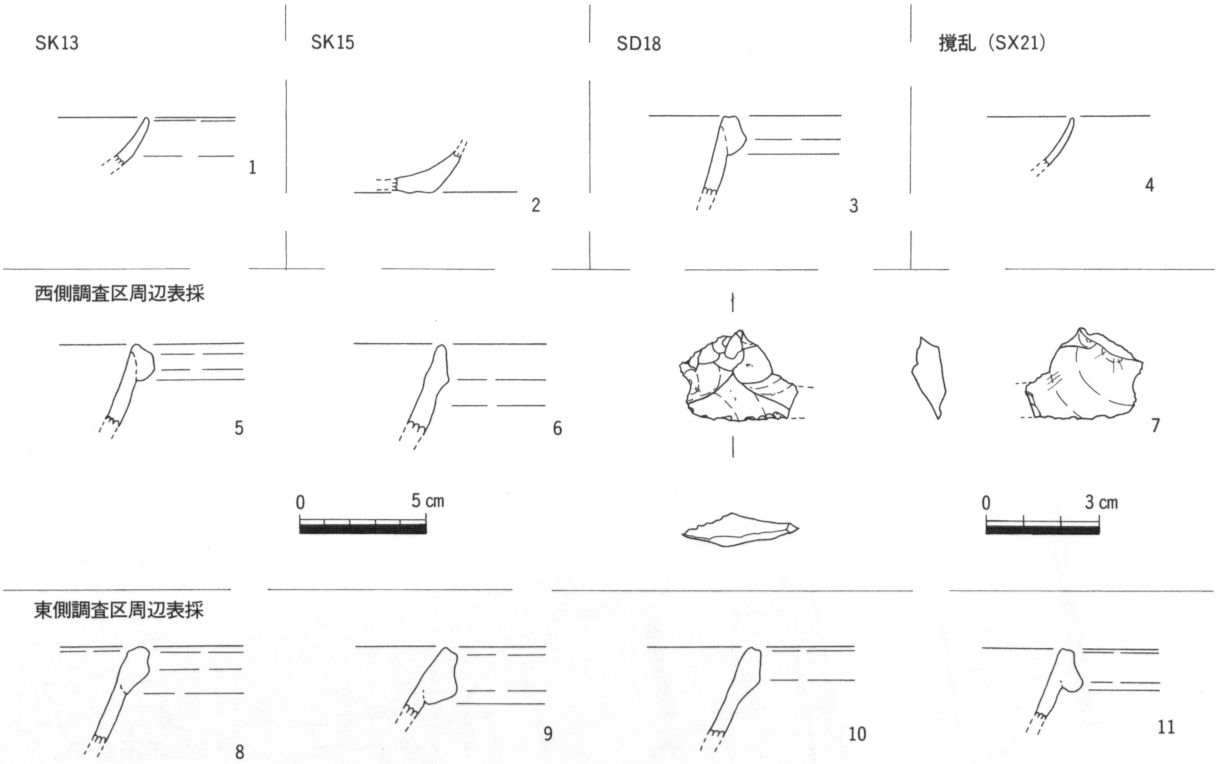


Fig.15　出土遺物（S＝1/3・1/2）

1は土師皿の口縁部小片である。

SK15出土遺物

2は土師皿の底部小片である。

SD18出土遺物

3は土鍋の口縁部小片である。

撹乱内出土遺物

4は土師器の坏の口縁部小片である。

西側調査区周辺表採遺物

5・6は土鍋の口縁部小片である。7は黒曜石製のスクレイパーと思われる剥片で、水和が発達している。

東側調査区周辺表採遺物

8～11は土鍋の口縁部小片である。

SK15出土骨片

動物の四肢骨である。火葬骨のような白色ではなく、表面全体に鉄分が沈着している。調査時点で骨片と認識できず、水洗してしまったため遺存状態を悪くしてしまった。現時点ではこれは人間の尺骨もしくは撓骨であり、中世から近世にかけてのものと考えている。

第４章　　結語

１．SD05の可能性について

今回の調査区は中世西牟田氏の居城である西牟田城に当たる。『福岡縣三潴郡誌』によると、西牟田城は応仁16年（1484）に落城という記述があり、以後大永５年（1525）、天正12年（1584）に戦場となった事が伝えられている。これ以後西牟田氏は居城を要害である生津城（三潴郡三潴町大字生岩）、城島

Fig.16　西牟田城推定復元図（寺松伝助氏作成）と西牟田上京手遺跡位置図（S＝1/5,000）

城（三潴郡城島町大字城島）へと移し、西牟田城は以後廃城となり今に至っている。

西牟田城は現在ではその規模や遺構など不明な点が多いが、基本的に緊急時には水城となる構造をしていたと考えられる。寺松伝助氏の復元によると、西牟田城の城域は北および西側の外堀に倉目川を利用しその内側に城下町を囲む構造であり、字流の一角を本丸とされている。この考えに従えば、調査地区は西牟田城域の北西角ということになる。

今回確認されたSD05には流水の痕跡を示すような砂粒や砂利はなく、倉目川の旧川道とはなりえない。また、葦状の水辺にみられる植物の植物遺体を確認した事から、一定量の水量はあったと考えられる。推定の域を出ないが、SD05は西牟田城を防衛するための防御線として構築された溝の可能性を挙げておく。また、西牟田城についても、中世城郭の規模から見て、寺松氏が「本丸」とした２町ほどの区画が本来の城域であったと考えている。

２．SX10について

SX10（SK15）から出土した骨片は、おそらく人間の尺骨もしくは撓骨であると思われるが、状態が悪く、人骨ではない可能性も残されている。ここでは、両方の可能性について見ていきたい。

出土骨が人骨の場合、SK15は墓坑という可能性がある。近世墓が方形の掘り込みを有するのに対し、SK15は長方形の区画を有している。調査区周辺では、この一帯に以前墓地があったという記録もそれらしき物の存在を想定しうる石造物の記録も伝わっておらず、近世以降の新しい時期のものではない可能性がある。出土骨については、この地域は基本的に近世墓では木棺・木桶などは残っても人骨は風化してしまい、残らない事が多い。が、火葬骨の場合はこの限りではないので、中世以前の可能性もありうる。しかしながら、SX10は整った方形区画であり、戦国期の争乱に伴うものではないと考えられる。骨片の出土状態は、出土骨以外を伴っておらず、なんらかの事情で出土骨のみが遺存するような部位を埋葬した可能性がある。

出土骨が動物のものの場合、SX10による方形区画はなんらかの神域が設定されたものと考えられる。この場合、SK15・16の段落ちは柱状のものが立っていた可能性が有り、出土骨はSX10の築造の際に供物として捧げられたと思われる。しかしながら、SK15・16に柱痕跡は見当たらず、このような際に供物として動物の四肢を捧げるという事例を聞いたことがないため、筆者は前者の可能性が高いと思う。

このような遺構、遺物の出土状況は周辺では類例を聞かないので、より多くの方からの御教示をいただければと考えている。

＊　SX10およびSK15出土骨に関しては、福岡県教育庁の小田和利氏より多くの御教示を頂いた。

【参考文献】

右　田　乙次郎　『西牟田むらの生いたちの記』　筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会　1973
筑後市史編さん委員会・編　『筑後市史』　筑後市史編さん委員会　1998

Tab.1　遺構一覧表

Fig.	S番号	遺構番号	グリット	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
9	1	SK01		(0.7)	0.6	0.1	−−	(長方形)	(逆台形)	土師器片（紛失）	中世	調査区外、床面に0.05～0.15mの小ピット有り
7	2	SP02		0.3	0.2	0.05		U字	逆台形			
7	3	SP03		0.4	0.2	0.05		長方形	逆台形			
9	4	SK04		0.7	0.5	0.2	N-48°-W	不定型	逆凸字			
6～8	5	SD05		−−	25.0	0.6			緩やかな皿状	植物遺体（葦？）		調査区外
(9)	6	SP06		−−	−−	0.2		円形？	逆台形？			SK01下位遺構
9	7	SK07		1.3	0.9	0.2	N-82°-W	不定型	逆凸字			
	8	−−										欠番
	9	−−										欠番
13	10	SX10										S15～18集合遺構
11	11	SK11		−−	−−	−−	−−			弥生土器片（後期～終末）？、土師器片	中世	調査区外
14	12	SK12		0.6	0.3	0.1	N-32°-E	隅丸長方形	緩やかな逆凸字	土師器片、焼粘土塊	中世	
14	13	SK13		0.5	0.4	0.1	N-10°-W	隅丸長方形	逆台形	土師皿、片	中世	
14	14	SK14		0.5	0.5	0.1	N-8°-E	不定型	逆台形	土師器片、骨片	中世	
13	15	SK15		0.9	0.4	0.2	N-83°-W	隅丸長方形	逆凸字	土師皿、土師器片、骨片	中世	SX10
13	16	SK16		0.9	0.5	0.3	N-76°-W	隅丸長方形	逆凸字			SX10
13	17	SK17		1.2	0.6	0.3	N-19°-E	隅丸長方形	逆台形	土師器片	中世	SX10
13	18	SD18		2.5	0.3	0.05～0.1			U字	土鍋、土師器片	中世	SX10
11	19	SX19								土師器片		性格不明
11	20	SX20								土師器片	平安～中世	足跡列
11	21	SX21								土師坏		撹乱

Tab.2　出土土器一覧表

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	色調（外/内）	胎土	焼成	備考
15	1	SK13	土師器	皿				口縁部小片	赤橙色	1～2㎜大の砂粒多い。	良好	
15	2	SK15	土師器	皿				底部小片	黄灰色～橙色	1㎜大の砂粒僅か。金雲母多い。	やや良	
15	3	SD18	土師器	土鍋				口縁部小片	灰茶色	1㎜大の砂粒、金雲母多い。	良好	
15	4	SX21（撹乱）	土師器	坏				口縁部小片	橙色	精良。金雲母少なく、赤色粒子多い。	良好	撹乱内出土
15	5	西側調査区周辺表採	土師器	土鍋				口縁部小片	橙色	2㎜大の砂粒多く、金雲母、赤色粒子多量。	良好	
15	6	西側調査区周辺表採	土師器	鉢？				口縁部小片	白灰色	1㎜大の砂粒、金雲母多い。	やや良	
15	7	東側調査区周辺表採	土師器	土鍋				口縁部小片	黄橙色／橙色	2㎜大の砂粒、雲母、赤色粒子を多く含む。	良好	
15	9	東側調査区周辺表採	土師器	土鍋				口縁部小片	橙色～灰色／橙色	精良。雲母、赤色粒子を少し含む。	不良	
15	10	東側調査区周辺表採	土師器	土鍋				口縁部小片	茶色／黄茶灰色	1～2㎜の砂粒多く、雲母、赤色粒子少ない。	不良	
15	11	東側調査区周辺表採	土師器	土鍋				口縁部小片	暗黄灰色／黄橙色	1～2㎜の砂粒多く、雲母、赤色粒子少ない。	不良	排水路掘削時出土

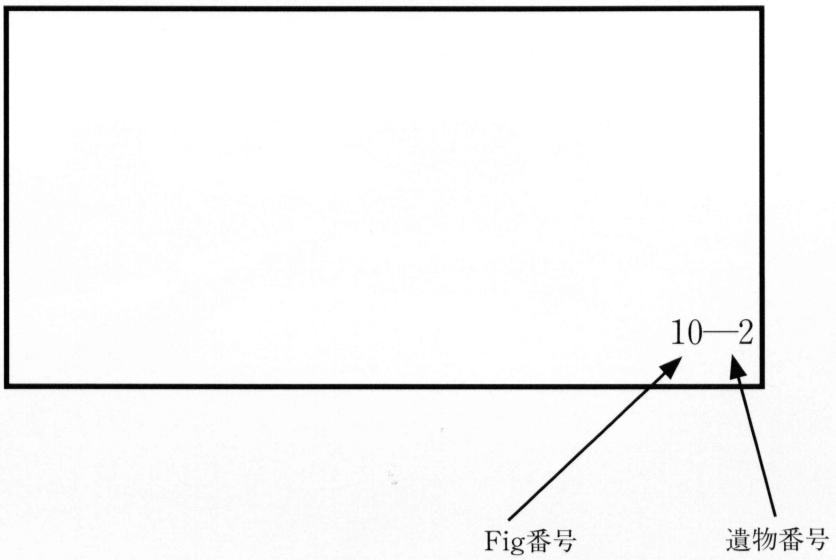
Tab.3　出土石器一覧表

Fig.	No	遺構	種別		全長（cm）	全幅（cm）	器厚（cm）	重量（g）	石材	遺存量		備考
15	8	西側調査区周辺表採	スクレイパー		(3.1)	(2.4)	0.8	4.2	漆黒黒曜石	一部欠損		水和発達

PLATE

凡　例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

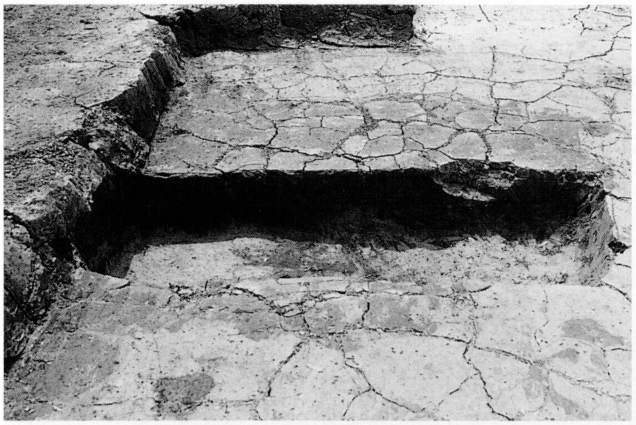


Pla.1

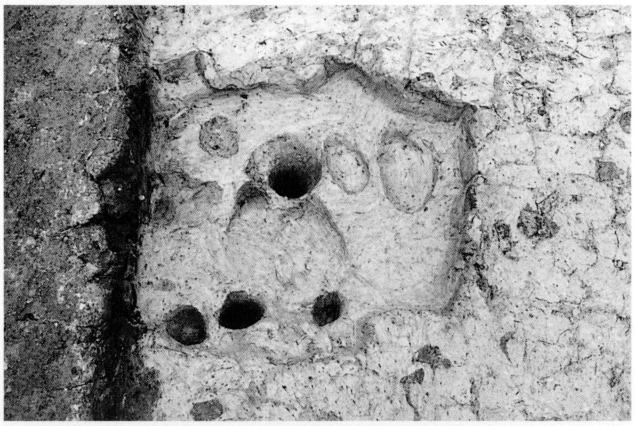
1　西側調査区　全景　（南から）

2　西側調査区　全景　（北から）

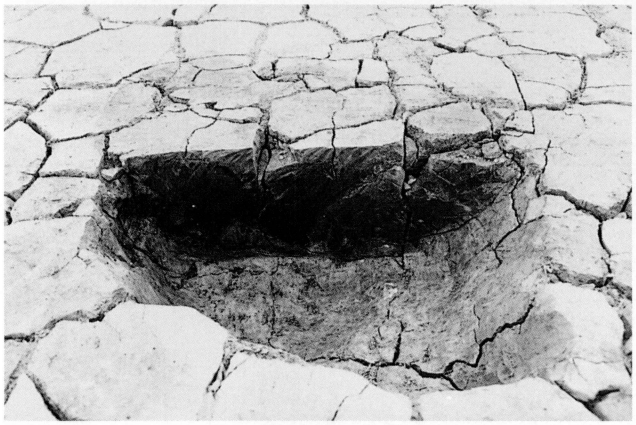
1　SD05　土層断面（部分）　（西から）



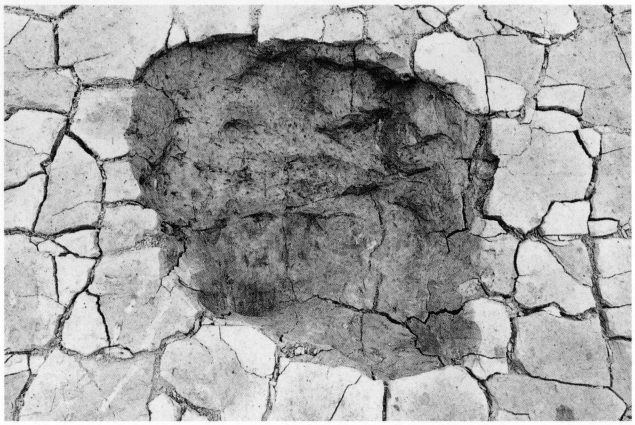
2　SK01　土層断面　（北から）



3　SK01　完掘状況　（北から）



4　SK04　土層断面　（北から）

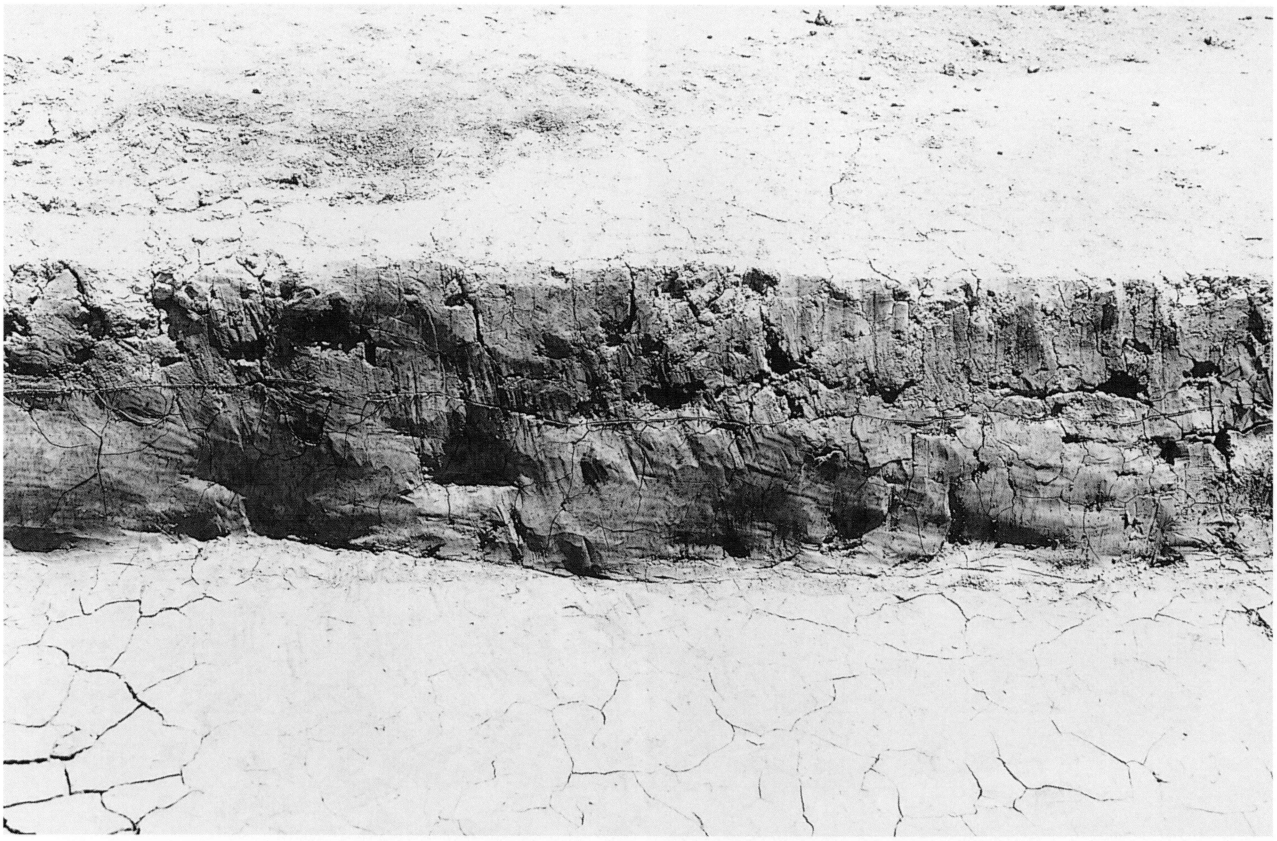


5　SK04　完掘状況　（北から）

Pla.3

1　東側調査区　全景　（西から）

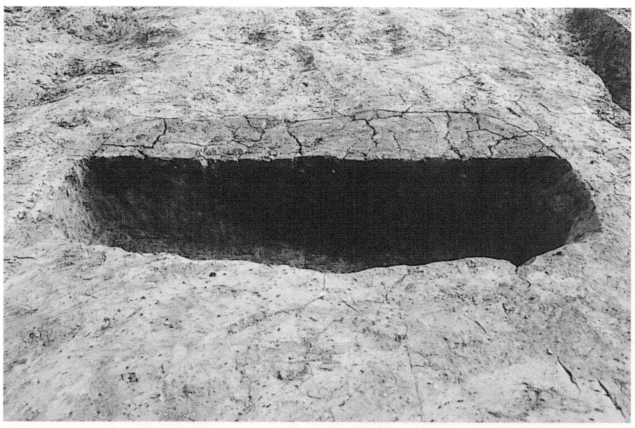
2　東側調査区　全景　（東から）



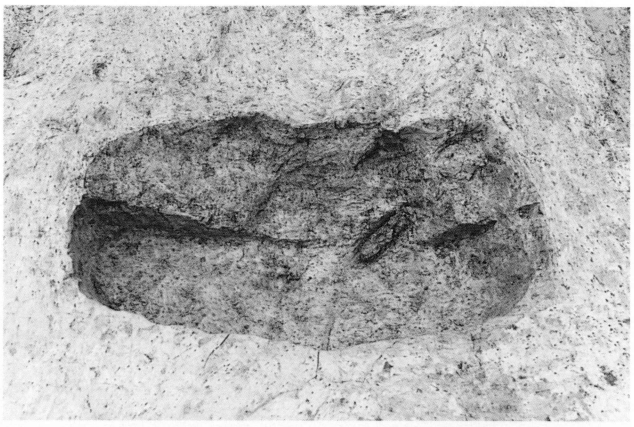
1　東側調査区　基本層序　（北から）

2　SX10　（南から）

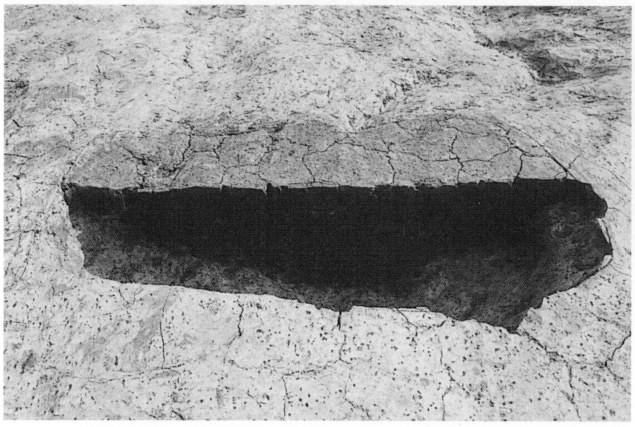
Pla.5



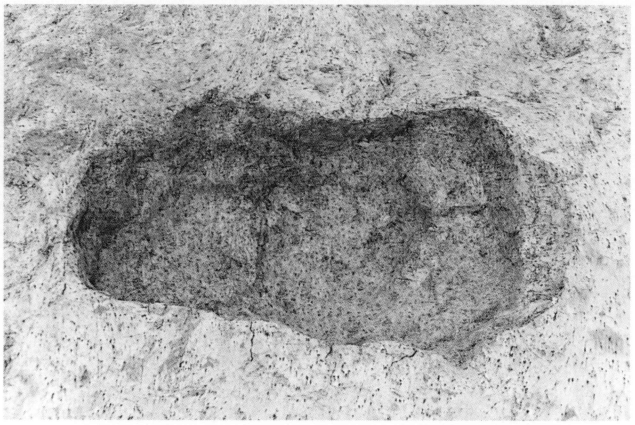
1　SK15　土層断面　（北から）



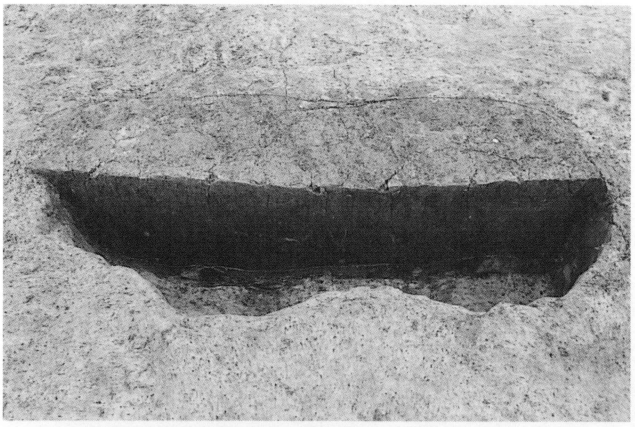
2　SK15　完掘状況　（北から）



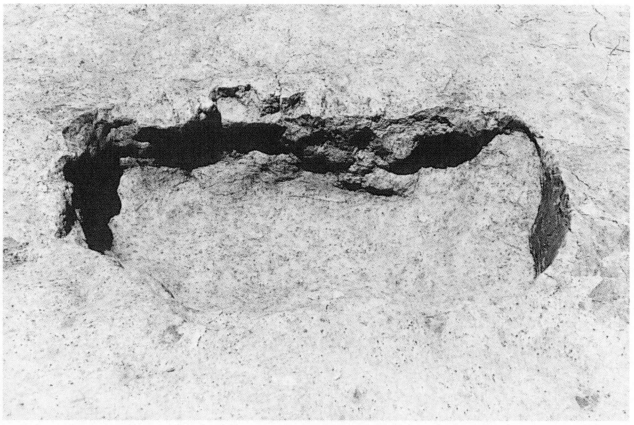
3　SK16　土層断面　（北から）



4　SK16　完掘状況　（北から）



5　SK17　土層断面　（東から）



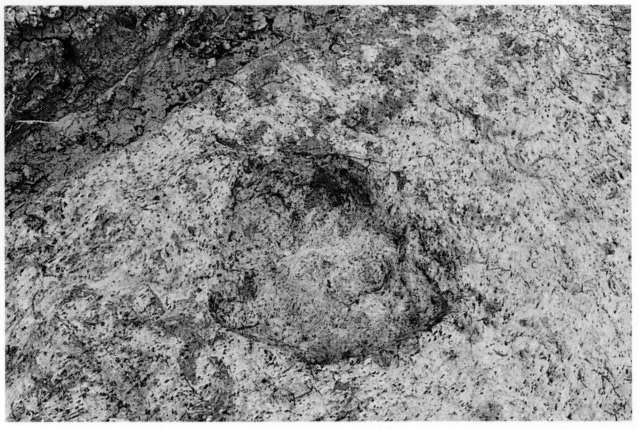
6　SK17　完掘状況　（東から）

1　東側調査区　小土壙群　（南から）

2　SK11　完掘状況　（東から）

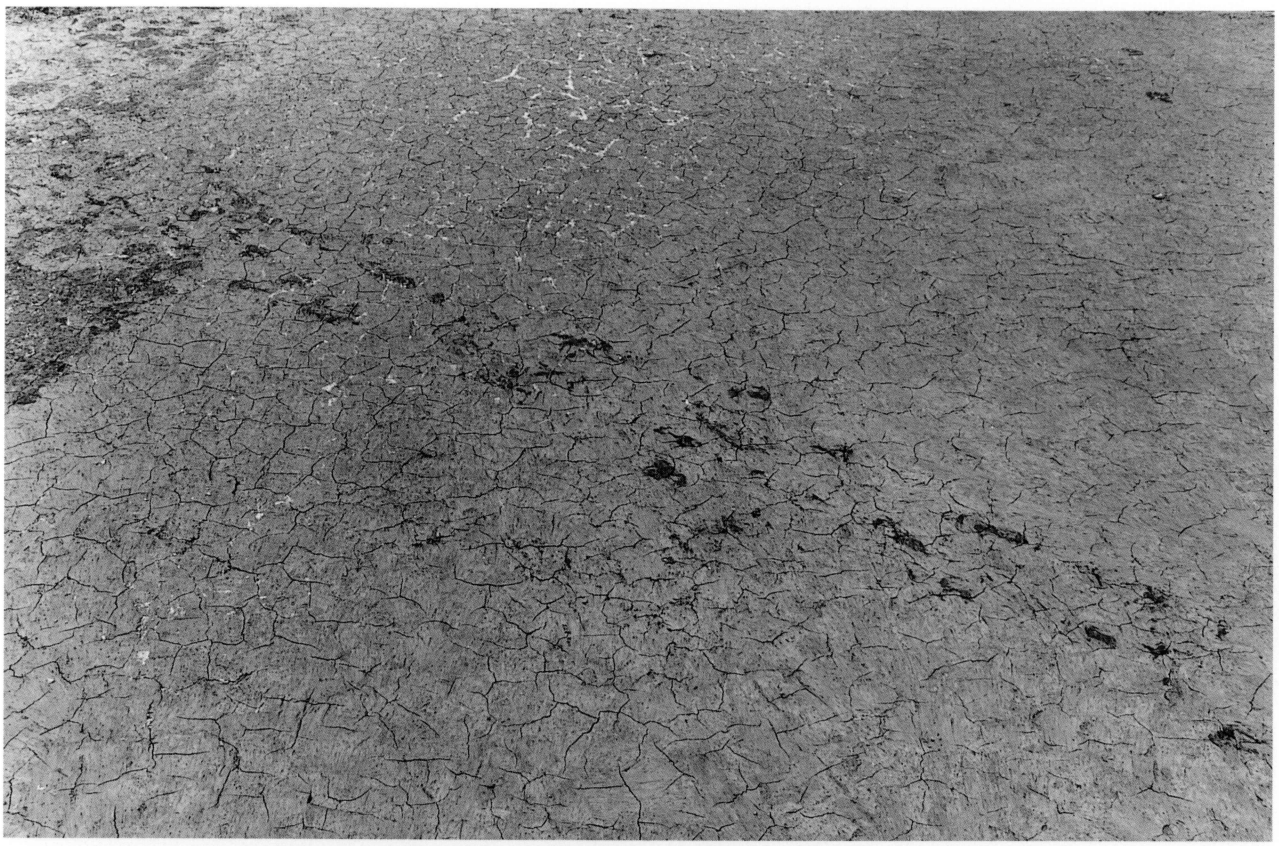
3　SK12　完掘状況　（東から）

4　SK13　完掘状況　（東から）

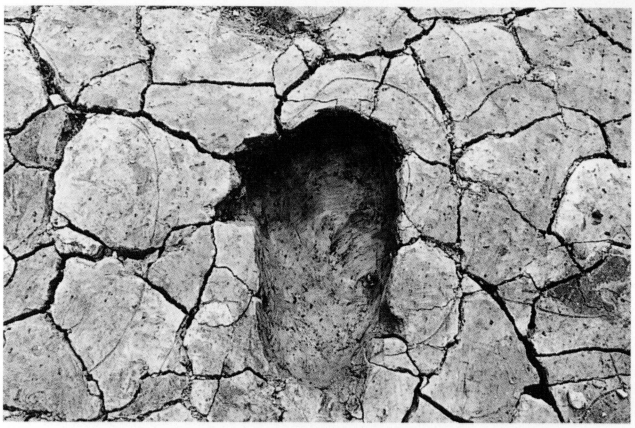


5　SK14　完掘状況　（東から）

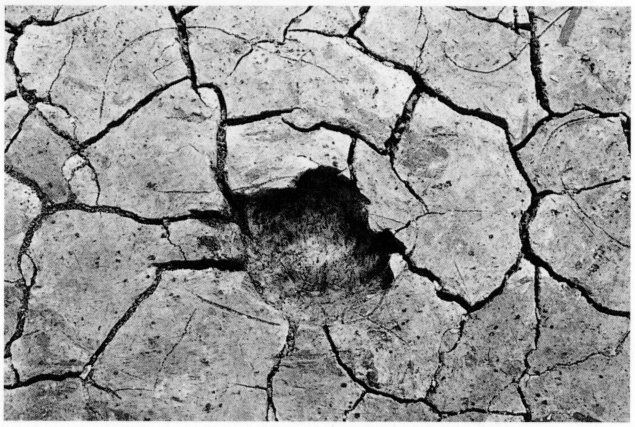
Pla.7



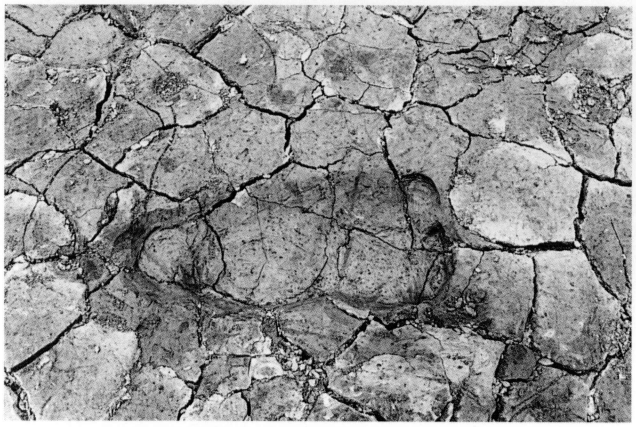
1　SX20　（南から）



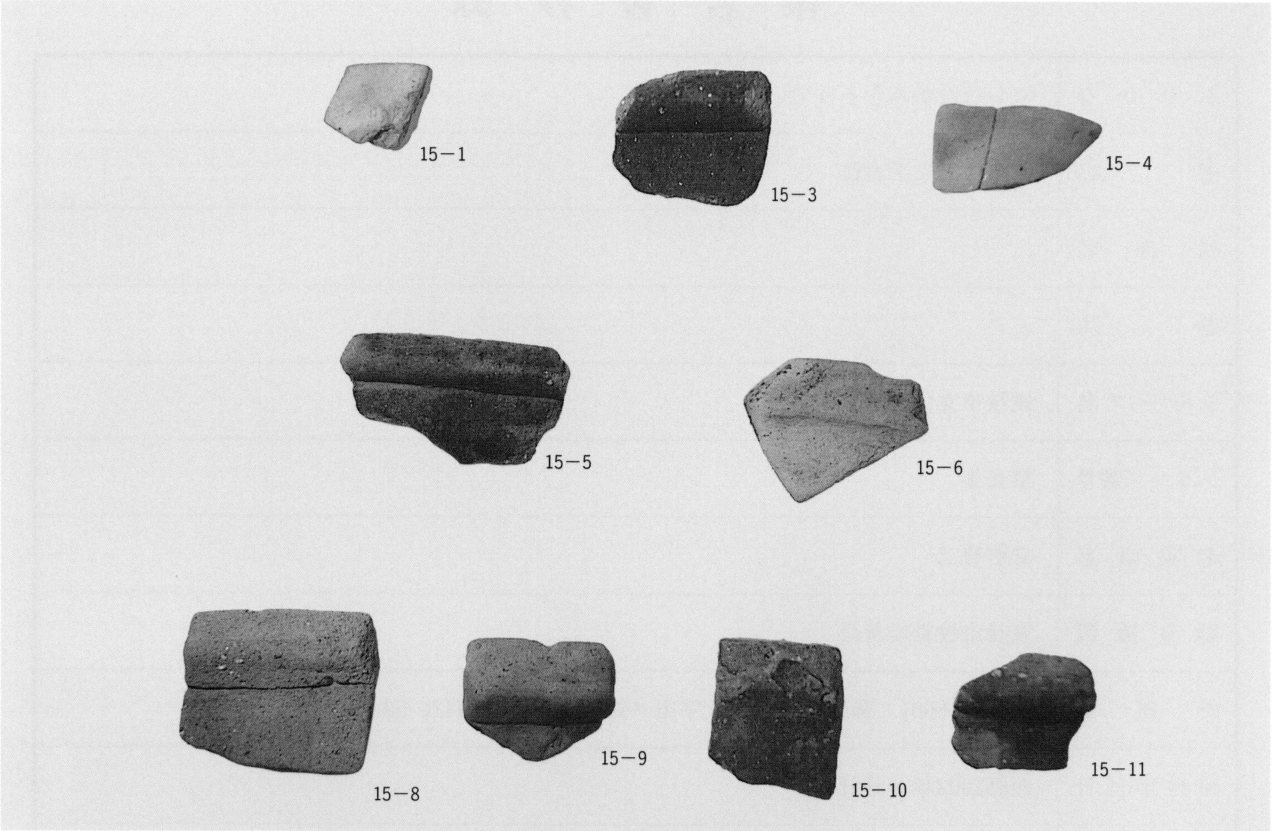
2　SX20a　完掘状況　（東から）



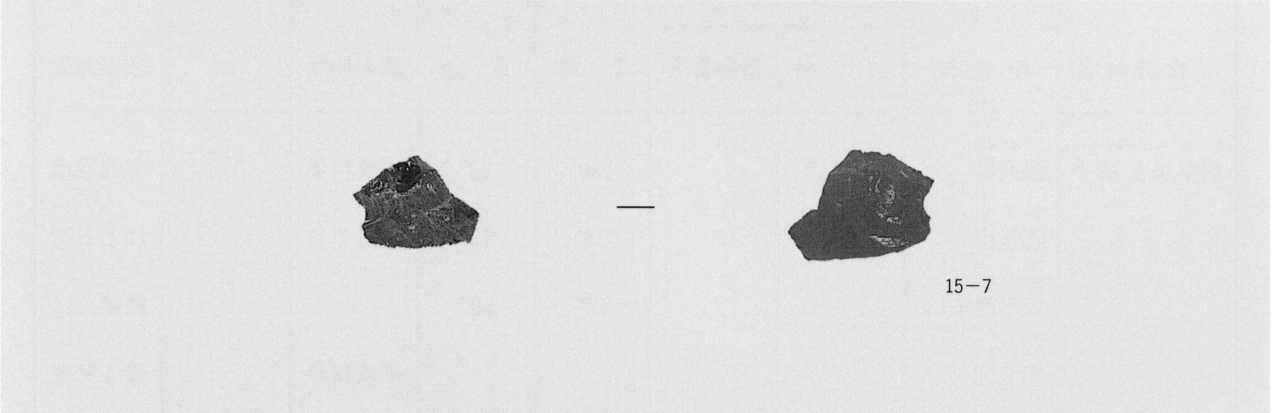
3　SX20　完掘状況　（東から）



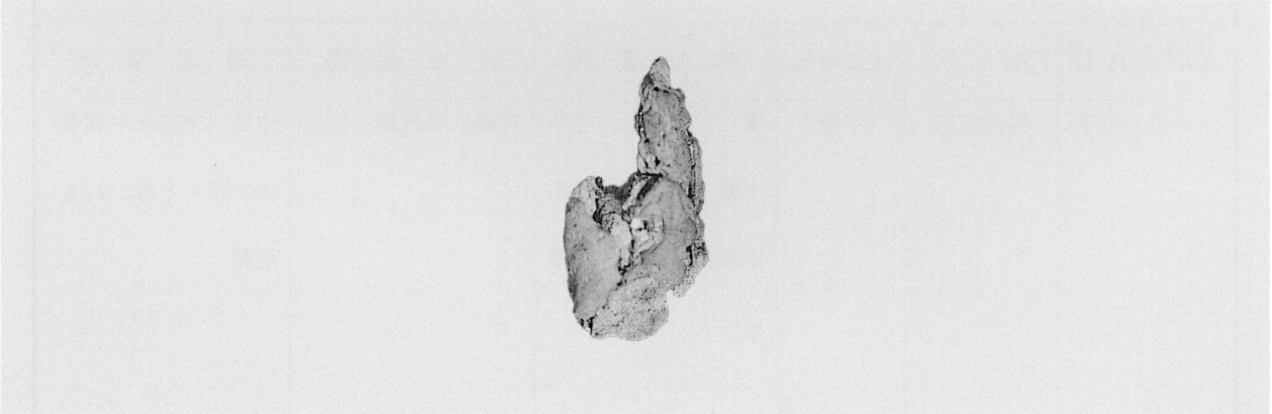
3　SX20c　完掘状況　（東から）



1　出土土器



2　出土石器



3　出土骨片

西牟田上京手遺跡
筑後市文化財調査報告書　第46集
平成15年３月31日　刊行
発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
印刷　大同印刷株式会社
佐賀市天神一丁目１番32号
TEL　0952－24－8450(代)